

私がエイズのボランティアを始めた理由（続編）

令和元年度第4号の保健室だよりで、このテーマの前半を書いたまま、続きを伝えられずに昨年度の3年生は卒業してしまった。卒業した子たち、ごめんなさい。_(._.)_

というわけで、今このタイミングでなぜ続編を書こうと思ったか…。それは、コロナウイルスに世界中が翻弄されている今だからこそ、「エイズ」が世界をパニックにさせていた時代があったことをみんなにも知ってもらいたいと思ったからなんだ。

前半を知らない人には、南高のホームページでバックナンバーを読んでもらうのが一番いいんだけど、それはめんどいなと思う人もいると思うので、まずは前半のあらすじを書くね。

【前半のあらすじ】

平成5年、当時勤務していた市川市の高校で、私は保健委員たちとエイズの勉強を放課後ゼミ形式で行っていた。ある土曜日、市内でエイズ関連のイベントがあり、有志の委員たちと一緒に参加した。その時委員の一人がHIV感染者の方と出会った。それをきっかけにその人（以下アルファさん）が学校に来てくれることになった。放課後保健室にアルファさんと彼の親友、保健委員有志、関心のある先生が集まり、アルファさんの話を聴くことができた。たくさん質問も出て、このお話し会は夜遅くまで続いた。保健委員から「こんなすごい話を自分たちだけが聴いたんじゃない。だから全校生徒にも聴いてほしい」という意見が出て、その後全校集会が実現した。

【ここから続編】

アルファさんのお話は、全校生徒の心にもたくさんの感動と衝撃を与えた。私は生徒は体育館では質問したくてもできないだろうと思っていたから、講演の後、アルファさんは保健室に来てくれるから、直接お話や質問したい子は、遠慮なく保健室に来てねと言った。そうしたら、なんと、放課後保健室に入りきれないほどの生徒たちが押しかけた。私は交通整理をするはめになった。アルファさんと一言だけ言葉を交わし、握手して満足して帰っていく子がほとんどだったが、その後何時間も残って用意したお茶とお菓子をつまみながら、ずっと歓談を続けた子もいた。

当時はまだHIV/AIDSは「死の病」と思われていた。感染経路はいたってシンプルで、性行為感染、経皮感染（注射針などを介しての感染）、分娩時の感染、母乳からの感染ということはすでにわかっていた。また当時（今でもかもしれないけど）、「自分の周りにはHIV感染者はいない」と思っている人が大多数だった。学校生活では誰もが血液を直接接触らないことで、HIVだけでなくいろんなリスクを回避できるとわかっていた。しかし、知識は頭では理解していても、感情がついていけない人も必ずいる。だから、「僕はHIVに感染してるんだよ」ってカミングアウトしてくれて、目の前に来てくれて直接お話でき、握手できる…。そんな経験はなかなかできないものだった。それにわかってはいても、ほんとに握手してうつらないのかなと不安に思う子もいたと思う。

最初にお話会に参加した保健委員の中にも、「一緒にいても感染しないことは十分わかってる。だけどやっぱり私は怖い」って、率直な感想を言ってくれた子がいた。その場の雰囲気流されることなく、自分の気持ちを言えるその子はすごいと思った。表面的にはわかったふりをして、心の中に不安な気持ちをしまっておくのは簡単だ。だけどあえてアルファさんがいる前で、不安を言えた子に対してアルファさんは、「よく本音を言ってくれたね。ありがとう。本当の理解は人によって差があるのは当然なんだ。ゆっくりでもいいんだよ。自分のペースでいいんだ。」って彼女に言ってくれた。彼女は泣いていた。この涙はどういう気持ちだったと思う？